

本木・地の神Ⅱ遺跡発掘調査報告書

土石採取事業に伴う発掘調査

令和6年3月

株式会社山友建設
一関市教育委員会

序

一関市大東町猿沢地区は、古くから交通の要衝であり、現在でも国道343号、456号が通っています。この地区では、縄文時代から人々の生活が確認でき、多数の埋蔵文化財包蔵地が所在していますが、その中に、本木遺跡・地の神Ⅱ遺跡があります。これらの遺跡は興田川の右岸に位置し、岩手県教育委員会の分布調査により、平成9年に縄文時代の遺跡として登録されています。付近の地の神Ⅰ遺跡からは、住居跡の可能性のある焼土遺構が縄文土器を伴い確認されており、本木遺跡や地の神Ⅱ遺跡も、同じような性格の遺跡と考えられています。

このたび、土石採取事業を令和2年度から実施するにあたり、市教育委員会による試掘調査を実施したところ遺構を確認したため、令和3年度に緊急発掘調査を実施しました。その成果をようやく本報告書にまとめることができました。本報告書により、この調査成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力をいただきました。衷心より感謝を申し上げます。

令和6年3月

株式会社山友建設

代表取締役 小野寺 真

一関市教育委員会

教育長 時 枝 直 樹

例 言

1. 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和3年度に実施した本木・地の神Ⅱ発掘調査の報告書である。
2. 調査は、一関市大東町猿沢字本木地内の土石採取事業に係る試掘調査において遺構を確認した範囲及びその周辺の掘削を受ける範囲の記録保存を目的とした、緊急発掘調査である。
3. 調査対象地は、本木・地の神Ⅱ遺跡（一関市大東町猿沢字本木6-2、9-6、33、35-1）である。
4. 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴（令和3年度）であり、現地調査は文化財課が担当した。

5. 調査体制（令和3年度）は以下のとおり。

一関市教育委員会	文化財課	課長	千葉 浩
		文化財係長	金野 修
		主任学芸員	菅原 孝明
		文化財調査研究員	光井 文行
			阿部 充
		会計年度任用職員	小岩 誠也

6. 本書の作成は令和5年度の文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は光井が行った。

一関市教育委員会	文化財課	課長	氏家 克典
		課長補佐兼文化財係長	金野 修
		学芸主査	菅原 孝明
		文化財調査研究員	光井 文行
			阿部 充
		会計年度任用職員	小岩 誠也

7. 本書図3に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。
（許可番号 令和6年3月14日 政第12003号）
8. 土層断面図の土色表示は、新版標準土色帖2002年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
9. 調査に係る無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は株式会社山友建設に、調査補助業務を本寺地区地域づくり推進協議会に、環境整備業務は株式会社山友建設に、それぞれ委託した。
10. 調査協力者・機関（敬称略・50音順）
伊東トナエ、及川幸子、小山和博、菊池一美、小岩寿男、佐々木マサ子、佐藤健爾、佐藤光雄、中澤吉男、二階堂孝子、八重樫一郎、横倉ハル子、
岩手県教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、株式会社山友建設、本寺地区地域づくり推進協議会

目 次

序	1
例言	3
目次	4
I 本木・地の神Ⅱ遺跡	
1 遺跡の位置と地理・歴史的環境	5
2 調査に至る経緯	10
3 調査結果	12
4 まとめ	14
遺構図版	15
写真図版	22

I 本木・地の神Ⅱ遺跡

1 遺跡の位置と地理・歴史的環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年9月20日に一関市、花泉町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに平成23年9月26日藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

中央部を南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（標高1626.5m）を中心とする火山性山岳風景地の「栗駒国定公園」（昭和43年《1968》）や北上川水系磐井川流域の史跡「骨寺村荘園遺跡」、（平成17年《2005》国指定）および重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年《2006》）国選定、下流部には変化に富んだ溪谷景観をなす名称及び天然記念物「巖美溪」（昭和2年《1927》国指定）がある。東側には、同じ北上川水系の砂鉄川流域に、名称「猯鼻溪」（大正14年《1925》国指定）がある。

本木・地の神Ⅱ遺跡のある一関市大東町（大東地域）は岩手県南東部に位置し、北は奥州市、住田町、東は陸前高田市、南は一関市千厩町（千厩地域）、西は一関市東山町（東山地域）と接している。

（一部 一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査』「1.位置と環境」より）

（1）地理的環境

本木・地の神Ⅱ遺跡のある一関市大東町猿沢は北上山地の南西部にあたる。東に室根山（標高895m）、北に鷹ノ巣山（標高792m）、蓬萊山（標高787m）、西に大鉢森山（標高633m）がある。地質は主として古生代の粘板岩・砂岩・石灰岩およびこれらに併入する花崗岩で構成されている。さらに横張、摺沢、横沢の各丘陵地に丸木層と呼ばれる新第三紀層が加わっている。

標高200～400mの丘陵地は、大住山を中心に砂鉄川と興田川に挟まれた地域及び蓬萊山を中心とする西部山地の東縁に分布し、主として花崗岩を基盤としている。標高200m以下の丘陵地は、砂鉄川南部の摺沢、若宮、西部の横沢、北部の伊手付近に分布している。基盤岩は花崗岩が主であるが、横張、摺沢、横沢の丘陵地は、新第三紀の丸木層と呼ばれる、垂円礫～円礫のくされ礫を含む砂礫層に覆われている。これらの丘陵地を開析する谷は、一般に浅くゆるやかである。

砂鉄川は、鷹ノ巣山、蛇山などの南麓を源頭部とし、大原地区で南寄りに西に向きを変え、興田川、曾慶川、猿沢川、山谷川などを集水して北上川と合流する。上流を除いてかなり広い谷底平野が発達するが、下流では猯鼻溪などの峡谷部が連続する。

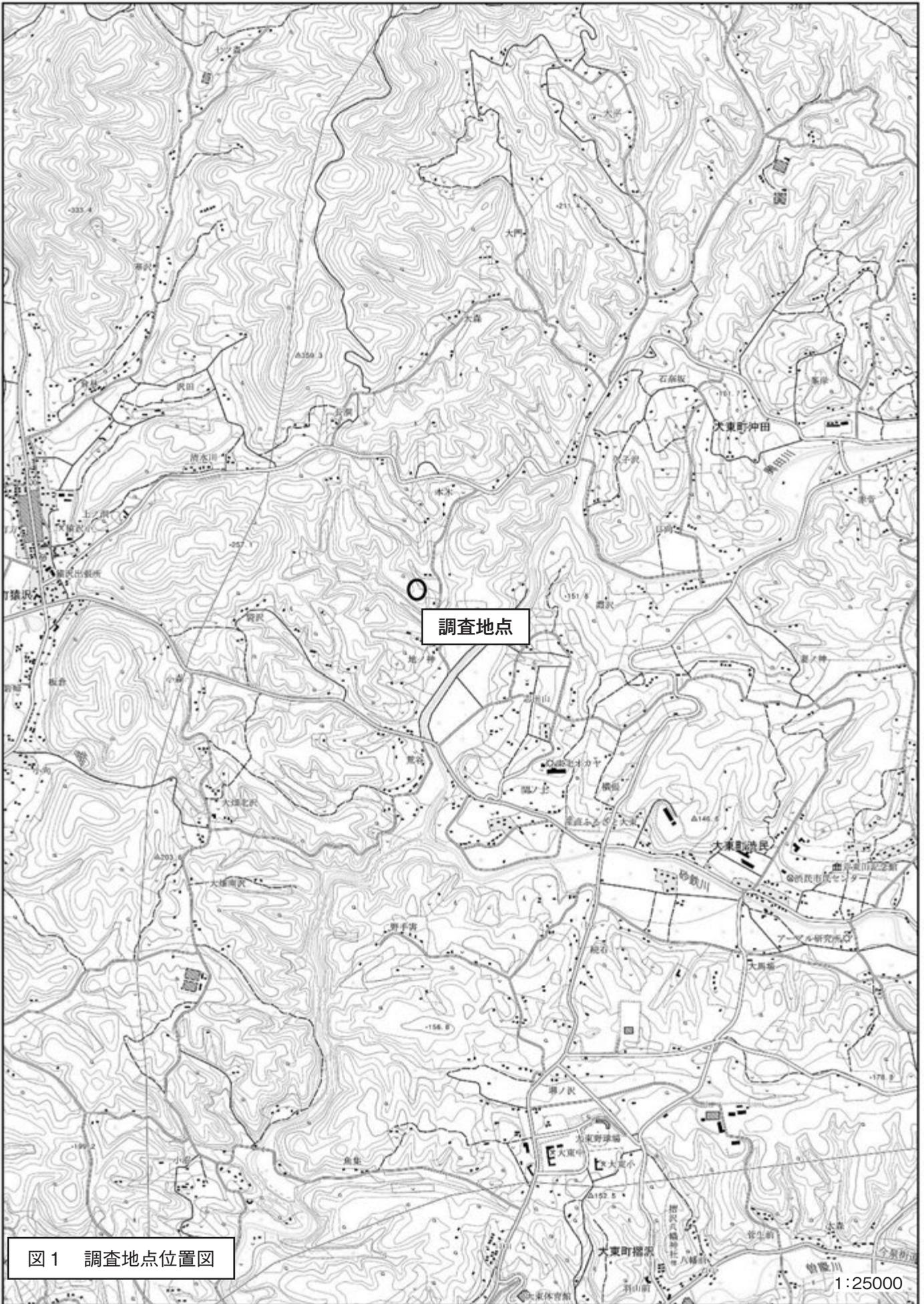


図1 調査地点位置図

(2) 歴史的環境 (図2、写真図版1)

本木・地の神Ⅱ遺跡のある一関市大東町(大東地域)の主な遺跡をみると、旧石器が百目木遺跡から出土している。縄文時代の遺跡は、前期が日向遺跡(6)、荒谷Ⅱ遺跡(20)、中期が天狗田遺跡(4)、小倉畑(11)、関根遺跡(12)、荒谷Ⅱ遺跡、大畑南沢遺跡(25)、金取遺跡(38)、後期が小向遺跡(23)、大畑南沢遺跡、鶴巻遺跡(35)、金取遺跡、晩期が新田遺跡(3)、天狗田遺跡、石奈坂遺跡(5)、沢田遺跡(7)、大畑南沢遺跡、大畑柳沢遺跡(26)、小沼遺跡(37)、金取遺跡、大洞地遺跡(29)、伊勢堂Ⅲ遺跡(33)がある。弥生時代の遺跡は大洞地遺跡で、弥生式土器が出土している。竪穴状遺構も確認されている。古墳時代の遺跡として、大洞地遺跡から北海道系の土器が出土しており、この時期に北から南下していたことがわかる。北海道系の土器は千厩地域にある大浜Ⅲ遺跡からも出土している。

古代の歴史的記述は残されていないが、考古学的に土師器、須恵器などが出土し、竪穴住居跡も検出されている。遺跡としては、金塚古墳遺跡(9)、下渋民遺跡(17)、中野台遺跡(18)、延貝館(27)、伊勢堂Ⅰ遺跡(31)、伊勢堂Ⅲ遺跡、佐野脇Ⅰ遺跡(34)、渋民萩館遺跡(28)などがあり、平安時代前期に人々が北上してきたことがうかがえる。11世紀に起こった前九年合戦に関する伝承として安倍頼時、宗任の館と伝わるものもある。

鎌倉時代以降、現在の岩手県南および一部を支配していた葛西氏も、15世紀になると一統支配が揺るぎだす。中小の家臣の間で緊張関係が高まり、特に天文11年(1542)から始まった「伊達氏天文の乱」以降は激しさを増し、大騒乱の様相を呈してくる。このような世情緊要の中で、磐井郡内でも大小様々な城館が構築、改築されている。『岩手県中世城館跡分布調査報告書』(岩手県教委1986)によると、砂鉄川流域66か所、千厩川流域54か所である。『大東町史上巻』(大東教委1982)によると、大東地域の城館は30箇所である。中世の城館の大半は15世紀から16世紀を中心に築造されている。

本木・地の神Ⅱ遺跡の周辺にある城館(図2、表1)は、北に柴山館(8)、東に室石館(13)、猿沢中館(14)、南に渋民萩館(28)などがある。これらの葛西領の諸城館は、天正18年(1590)の奥羽仕置の破却令により終焉を迎えている。

江戸時代になると、伝馬制度なども整備され、物資の流通とともに人馬の往来が盛んになった。この地域での砂金採取も中世から行われていたが文献に残るのは元禄年間からで、猿沢では、蓬山、峠、井沢田、小豆用の金山があり、中でも峠金山が最も栄えていたが、17世紀半ばに製作された正保大絵図には峠金山が「今ハ不出」と記され廃絶している。金山は長く続かず、砂鉄に移り変わっている。この大東地域でも砂鉄の採鉱や製鉄、製錬、炭生産がさかんに行われた。この地域の炯屋には寒沢炯屋、伊沢田炯屋、金取西沢炯屋がある。砂鉄から製錬された荒鉄は、近隣の鋳物師、鋳師、細倉鉛山などに売却されたが、この地方の荒鉄の多くは駄送により北上川岸まで運び、そこから舟で石巻に下して、鑄銭の原材料となった。北上川舟運では、荒鉄の他に内陸から煙草、紅花、生糸、楮、鉄製品や米が、沿岸からは塩や魚介類などが運ばれた。

(光井)



図2 周辺の遺跡分布図

1:25000

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
1	本木	散布地	縄文	竪穴建物跡・土坑・木炭窯、縄文土器	大東町猿沢字本木	
2	地の神Ⅱ	散布地	縄文	竪穴建物跡・土坑・木炭窯、縄文土器・石器・石製品	大東町猿沢字地ノ神、字本木	県教委調査時の遺跡名は「地の神Ⅰ」
3	新田	散布地	縄文	縄文土器（晩期）・石器	大東町沖田字新田	
4	天狗田	散布地	縄文	縄文土器（中・晩期）・石斧	大東町沖田字天野沢	
5	石奈坂	散布地	縄文	縄文土器（晩期）・石器	大東町沖田字石奈坂、字符集、字符集沢	
6	日向	散布地	縄文	縄文土器・土偶（前期）	大東町沖田字日向、字古内	岩手県東磐井郡の縄文時代前期土器群
7	沢田	散布地	縄文	縄文土器（晩期）・石器	大東町猿沢字沢田、字寒沢	
8	柴山館	城館跡	中世	櫓列・土塁・段・焼土・土坑・炭窯・炭焼き小屋跡、石器・鉄製品・陶磁器	大東町猿沢字倉林、字寒沢	諏訪館含む
9	金塚古墳	古墳			大東町猿沢字上ノ洞	神社
10	板倉	散布地、集落跡	縄文、平安	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼土・深耕施肥掘削溝・植栽痕、縄文土器・石器・鉄鏃・鉄製品・鉄滓	大東町猿沢字板倉	
11	小倉畑	散布地	縄文	縄文土器（中期）・石器	大東町猿沢字関根、字本木	
12	関根	散布地	縄文	縄文土器（中期）・石器	大東町猿沢字関根	
13	室石館（天狗田館）	城館跡	中世	本郭・堀	大東町沖田字霞沢、猿沢字志田山	
14	猿沢中館（中館・新渡戸館）	城館跡	中世	土塁・堀跡	大東町猿沢字志田山、字田中前	半壊
15	地の神Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	大東町猿沢字地ノ神、字田中前	県教委調査時の遺跡名は「地の神Ⅱ」
16	宇堂坂	社寺跡	中世、近世	土壇、塚（修験者の墓）？	大東町洪民字中野台	
17	下洪民	散布地	縄文、平安、近世	竪穴式建築・竪穴状遺構・土坑・溝・配石・焼土、縄文土器（中期）・土製品・石器・フレイク・土師器・磁器・鉄製品・鉄滓・銭貨	大東町洪民字関ノ上	
18	中野台	散布地、集落跡、生産遺跡	縄文、平安、近世	竪穴住居・掘立柱建物・集石・配石・環状列石・立石・焼土・甕棺墓・捨場遺構・土坑・柱穴・溝・採掘坑、縄文土器（中～後期）・土製品・石器・石製品・土師器・フレイク・アスファルト・植物・動物遺体	大東町猿沢字中野台、字関ノ上	
19	荒谷Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器・フレイク	大東町猿沢字荒谷、洪民字中野台	県教委調査時の遺跡名は「新渡戸Ⅱ」
20	荒谷Ⅱ	散布地	縄文、古代	縄文土器（前・中期）・石器・鉄滓	大東町猿沢字荒谷、字石穴	県教委調査時の遺跡名は「新渡戸Ⅰ」
21	森の上	散布地	縄文	縄文土器・石鏃	大東町猿沢字小森	
22	小森	散布地	縄文	石鏃	大東町猿沢字小森	
23	小向	散布地	縄文	縄文土器（後期）	大東町猿沢字小向	
24	猿沢要害館	城館跡	中世	郭・平場・空堀	大東町猿沢字大畑北沢	口伝
25	大畑南沢	散布地	縄文、平安	縄文土器（中・後・晩期）・石器・須恵器	大東町猿沢字大畑南沢、字大畑北沢	
26	大畑柳沢	散布地	縄文、平安	縄文土器（晩期）・石斧・須恵器	大東町猿沢字大畑南沢	
27	延貝館	城館跡	中世		大東町洪民字野手宮	
28	洪民萩館	城館跡	中世	平場・土塁	大東町洪民字大洞地、字横張	
29	大洞地	散布地	縄文、弥生、古代、近世	竪穴状遺構・土坑・溝・竈跡・配石・集石、縄文土器・弥生土器・続縄文土器・土師器・須恵器・土製品・羽口・石器・母岩・フレイク・チップ・鉄製品・銭貨	大東町洪民字大洞地	
30	小林				大東町洪民字小林、字伊勢堂	
31	伊勢堂Ⅰ	散布地	縄文	竪穴式住居・竪穴状遺構・掘立柱建物・柱穴列・土坑・溝、縄文土器・石器・土製品・土師器・須恵器・鉄製品・羽口・陶器・銭貨	大東町洪民字伊勢堂	
32	伊勢堂Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器・石器・フレイク	大東町洪民字伊勢堂	
33	伊勢堂Ⅲ	散布地	縄文、平安	捨場遺構・焼土・竪穴式住居・溝・耕作時足跡・土坑・畝間状遺構・陥し穴・杭列、縄文土器・鉄滓・羽口・土師器・須恵器・土製品・石器・石製品・鉄製品・銭貨	大東町洪民字伊勢堂、字八幡前	
34	佐野脇Ⅰ	集落跡	縄文、中世	竪穴住居跡・柱穴・土坑・溝、縄文土器・石製品・土師器	大東町洪民字佐野脇、字観音寺、字和田沢	
35	鶴巻	散布地	縄文	縄文土器（後期～？）	大東町洪民字鶴巻、字大馬場	
36	大馬場	散布地、生産遺跡	縄文、平安	縄文土器・須恵器（9C）	大東町洪民字大馬場	県内5例目の遺構
37	小沼	散布地	縄文	縄文土器（晩期）・石棒	大東町摺沢字小沼	
38	金取	散布地	縄文	縄文土器（中・後・晩期）	大東町猿沢字金取南沢	範囲広がる可能性あり

表1 周辺の遺跡一覧表

2 調査に至る経緯

令和2年(2020)3月13日、一関市大東町猿沢字本木33、35-1における土石採取事業にかかる試掘調査依頼書が提出された。この場所は、包蔵地外であり既に土石採取場所として事業が行われていた。しかし、本事業により包蔵地「本木」「地の神Ⅱ」へ近接することとなったため、包蔵地の範囲を確認する必要があるためである。

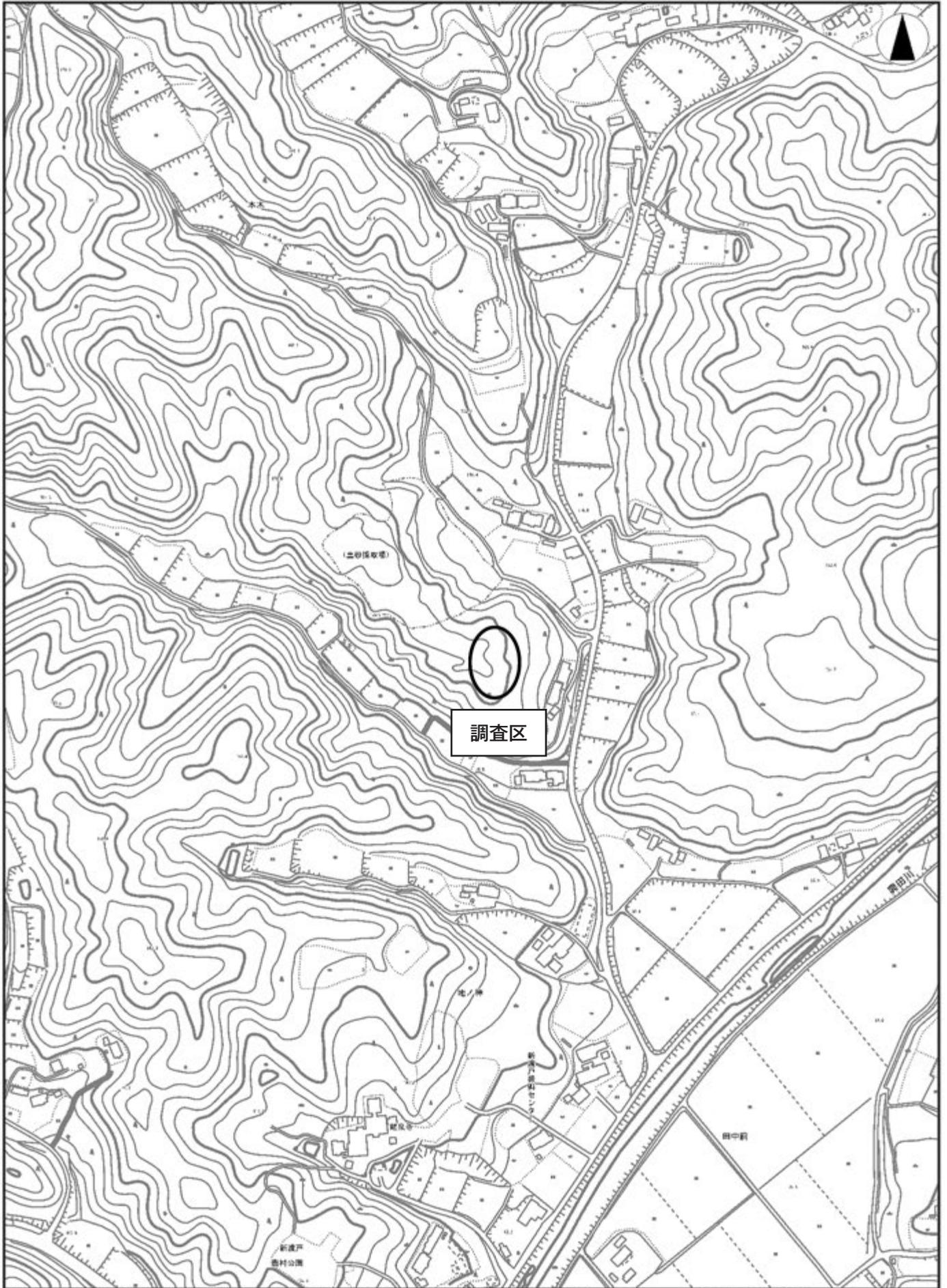
試掘調査依頼書に基づき、4月7日、9日、10日、14日、21～23日にかけて試掘調査を実施した。調査区域内に、長さ約7～12m(1か所のみ28m)、幅2mのトレンチを20本設定し地山まで掘り下げたところ、トレンチ2から竪穴建物1棟、トレンチ3から土坑1基、トレンチ8・9から炭窯2基、トレンチ15・16から炭窯3基を確認した。遺物は確認できなかったため時代は不明であったが、土石採取事業により地形が改変されることが明らかであったため、本木遺跡・地の神Ⅱ遺跡の範囲を確認する必要があると判断した。

試掘調査の結果を受けて、工事主体者である株式会社山友建設と一関市教育委員会文化財課で協議を行った。その結果、発掘調査を令和3年度に先送りすること、試掘調査で遺構を確認した範囲を縄張りして発掘調査範囲を示すとともにその場所へ至る道を確保すること、遺構を確認できなかった範囲については土石採取事業を行ってよいことを取り決めた。この協議に基づき、5月13日付で埋蔵文化財発掘の届出の提出を受け、工事に際して事前の発掘調査を実施する旨を5月14日付教文第02013号文書により指示した。

発掘調査を令和3年度に先送りした理由は、既に緊急発掘調査の実施が決まっていたことによる。実際に、令和2年5月11日から7月17日にかけて上水道工事に伴う一関城遺跡発掘調査(岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集、以下第○集と表記)を、7月20日から11月13日にかけて個人住宅新築工事に伴う八丁館遺跡発掘調査(第33集)を、9月7日から9月17日にかけて下水道工事に伴う月町遺跡発掘調査(第31集)を実施している。

また、令和3年度は骨寺村荘園遺跡確認調査(第34集)を先に実施したことから、本木・地の神Ⅱ遺跡の発掘調査は、令和3年(2021)7月19日から開始している。

(菅原)



※敷地の境界、その他掲載されている情報の内容を証明するものではありません。

縮尺 1/5000

図3 調査区位置図

3 調査結果

調査地点は、一関市大東町猿沢字本木地内に所在する。標高は116～123mである。東に伸びる丘陵の東端に位置する。現況は土取り地及び雑木林である。調査は重機により、表土を除去した後、手作業で、Ⅱ層上面の地山で遺構検出、精査を行った。調査区は北側及び東斜面を北調査区（本木遺跡）、中央にある尾根の頂部の平坦面を中央調査区（地の神Ⅱ遺跡）、南にある南斜面を南調査区（地の神Ⅱ遺跡）と呼ぶこととした。調査は北調査区、中央調査区、南調査区と順に進めた。調査後、土石採取が行われるため、遺構の埋め戻しは行わなかった。

調査期間は令和3年7月19日～10月15日、調査面積は約820㎡。

平面図の作成に当たっては、下記の基準杭の座標をもとに、実測を行った。写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は、以下のとおりである。

基準点 (No.1) X=-107153.829、Y=42075.804、H=119.442

基準点 (No.2) X=-107175.373、Y=42076.126、H=119.840

基準点 (No.5) X=-107245.089、Y=42055.354、H=121.658

基準点 (No.6) X=-107243.103、Y=42030.793、H=120.268

(1) 基本土層

I層：10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト層。しまっていない。

粘性なし。植物根多い。表土。層厚約10～20cm。

II層：10YR5/6黄褐色砂質シルト層。ややしまっている。

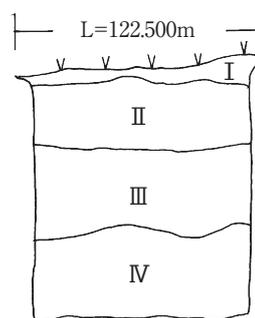
やや粘性あり。遺構検出面。層厚約20～30cm。

III層：10YR6/6明黄褐色シルト層。しまっている。粘性なし。

下位に明黄褐色パミスを多く含む。層厚約40cm。

IV層：10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト層。ややしまっている。

粘性なし。浅黄橙色のパミスを多く含む。層厚約50cm以上。



〈基本土層図〉

(2) 確認された遺構

確認された遺構は、大溝跡1条、土坑1基、炭焼き窯跡2基である。

北調査区

大溝跡SD-1（第5・6・7図、写真図版2）

北調査区から検出された。Ⅱ層上面で黒褐色シルトとの細長い大きな広がりが見られ遺構としたものである。大溝跡は北調査区の頂部である南西側から発して、東斜面を斜めに横切って北東に伸び、さらに斜面下方で東側にやや曲がり斜面下方に伸びているものである。北側の最先端は調査区域外にある。

規模は中央部（B-B'）で最大で幅4.4m、深さ約2mである。斜面下方の北端では幅約2.7m、深さ約1.3mである。断面形は基本的にV字形ないし開口部が開くU字形を呈していたと推定されるが、溝の下部壁が砂質シルトを切ってつくられているため、水による浸食を強く受けていて原形をとど

めておらず、正確には不明である。検出されている大溝跡の長さは水平距離で28mを測り、実際は30m以上である。

埋土は、北端（A-A'）では最上部がにぶい黄褐色シルト層、上部が炭化物を僅かに含む主に黒褐色シルト層、中部が明黄褐色シルト層、下部が壁からの崩壊土を多く含むにぶい黄褐色シルト層で構成されている。

中央部の埋土（B-B'）は、最上部が明黄褐色シルトの小ブロックを少量含むにぶい黄褐色砂質シルト層、上部が明黄褐色シルト層、下部が壁からの崩壊土を大半占める黄褐色粘土質シルト層である。大溝跡は、壁の崩壊土や自然堆積で中位まで埋まって窪みU字状に堆積した時点で、主に明黄褐色シルトあるいは粘土質シルトで人為的に皿状に埋め戻されている。その後、自然堆積し、さらににぶい黄褐色シルトで埋め戻され、自然堆積し現在に至っている。北側半分の壁面は、V字形に直線的であるが、底面は浸食や自然崩壊を受けて凹凸が大きい。中央部では壁面が大きく浸食を受け、変形している。

出土遺物はない。大溝跡の機能は立地、形態、規模から防御、境界よりも排水路や土取り作業に関係する溝跡の可能性も考えられる。時期は不明である。

土坑SK-1（第5・7図、写真図版3）

北調査区東斜面の中央部にあり、SD-1大溝跡から東に3m下にある。南側半分試掘調査時に重機により削平を受けている。

平面形はやや不正な円形を呈していたと推定される。規模は東西径約1.1m、深さ約20cmである。埋土は最下部ににぶい黄褐色シルト層が僅かにあり、大半が小円礫を全体に僅かに含む黒褐色シルト層で占められている。自然堆積である。底面は斜面下位の東側が深く窪んでいるが、木根などによる攪乱と推定される。底面全体は皿状に呈している。底面西側に径20cmの扁平な礫が出土している。遺物は出土していない。時期は埋土の特徴等から、縄文時代に属する可能性があるが、遺物や、類例がないことから不明である。

中央調査区

遺構は検出されなかった。焼土や炭を含む土は動いたもので、原位置のものでなかった。炭窯が北側にあった可能性がある。

南調査区

炭窯跡SW-1（第9・10図、写真図版4・5）

南調査区中央の斜面下位にあり、試掘調査の際、表土を除去した時に炭化室の焼土化した壁や焚口部の焼土が広がっており遺構としたものである。検出面はⅡ層上面である。斜面の等高線に直交する形でつくられている。炭化室の平面形は卵形を呈し、長軸径（南北）径約3.7m、最大幅約2.7m、最深約50cmである。焚口部はほぼ楕円形の形状を呈し、南北径約1.4m、東西径約1.2mである。炭化室の埋土は上部が明黄褐色シルト層、中部が炭化物を少量含む暗褐色シルト層、下半部が天井部の崩壊土や焼土塊を多く、炭化材を少量含む暗赤褐色シルト層で構成されている。炭化室の底面は、表面が黒色化し緩やかな凹凸があり、ガリガリに硬く、その下部は火熱により約4cmの厚さで赤変している。煙出し口は長径32～40cmの扁平な川原石で、長さ約90cm、奥行約60cm、高さ約50cmの規模で、長方形に組み合わせて作られている。そこから煙道が斜面上約1.2m伸びている。煙道は斜面に沿って上り、一旦下降して再び上昇している。溝が炭化室の壁に沿う形で幅約8～20cm、深さ約10～24cmの規模で巡っている。焚口部には、火熱により楕円状に赤変している。規

楕は長径約1.1m、短径約80cm、厚さ約10cmである。出土遺物はない。時期は、形態・規模から「小野寺式」と類似しており、近代で20世紀前半以降のものと考えられる。

炭窯跡SW-2（第10図、写真図版3）

南調査区西側の南斜面下位に位置している。試掘調査で、表土を掘り下げた際に焚口部の焼土が検出され遺構とわかったものである。斜面の等高線に直交してつくられている。炭化室は削平を受けている。平面形は炭化室がやや不正な円形、焚口部も不整な円形を呈している。規模は、炭化室で南北径約1.62m、東西径約1.54m、深さ約42cm、焚口部で南北径約1.06m、東西径約1.06m、深さ約26cmである。炭化室の埋土は上半部が黄褐色砂質シルト層、下半部がにぶい黄褐色～明黄褐色砂質シルト層で占められている。炭化室の底面は平坦で火熱により赤変している部分がある。壁は攪乱を受け凹凸が大きい。焚口部の埋土は、主に炭化粒を多く含む暗褐色シルトで占められている。焚口部は、浅皿状を呈し、東西径約1.26m、南西径約1.18m、厚さ約6cmの規模でほぼ円形状に焼土化している。煙道は検出されていないが、炭化室壁の上方の中央部が周りよりも赤変していることから、ここが煙出し口であったと推定され、煙道は削平され消失したと推定される。出土遺物はない。形態から炭窯跡SW-1より古く近世以降のものと考えられる。

4 まとめ

今回の調査で地の神Ⅱ遺跡から検出された炭窯は、近代のもの（SW-1）と近世のもの（SW-2）と新旧2つのタイプが検出された。炭窯は狐禅寺の大平遺跡からも検出され、規模が長軸3.5m、最大幅約2.5mでほぼ同じ時期で形態からSW-1よりやや古い。猿沢地区の柴山館遺跡から検出された炭窯1基は規模が長軸約3.8m、最大幅約3.2m、深さ約60cm（図からの推定値）のものである。形態からSW-1より古くSW-2より新しく、近世から近代にかけてのものである。

本木遺跡の大溝跡（SD-1）と立地、形態、規模の点から近似した遺構が、一関市室根町の八幡沖遺跡から検出されている。近世の排水用と考えられる大溝跡である。今回の調査で、炭窯の変遷を知る資料や作業などの排水に関連する大溝跡の資料が得られた。猿沢地区の人々の生活、産業を考える考古資料としても有効に活用できるものである。

（光井）

（参考引用文献）

一関市教育委員会1985『大平遺跡』一関地区遊水地関連埋蔵文化財調査報告書

一関市教育委員会2010『柴山館遺跡』一関市埋蔵文化財調査報告書第11集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2018『八幡沖遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書第677集

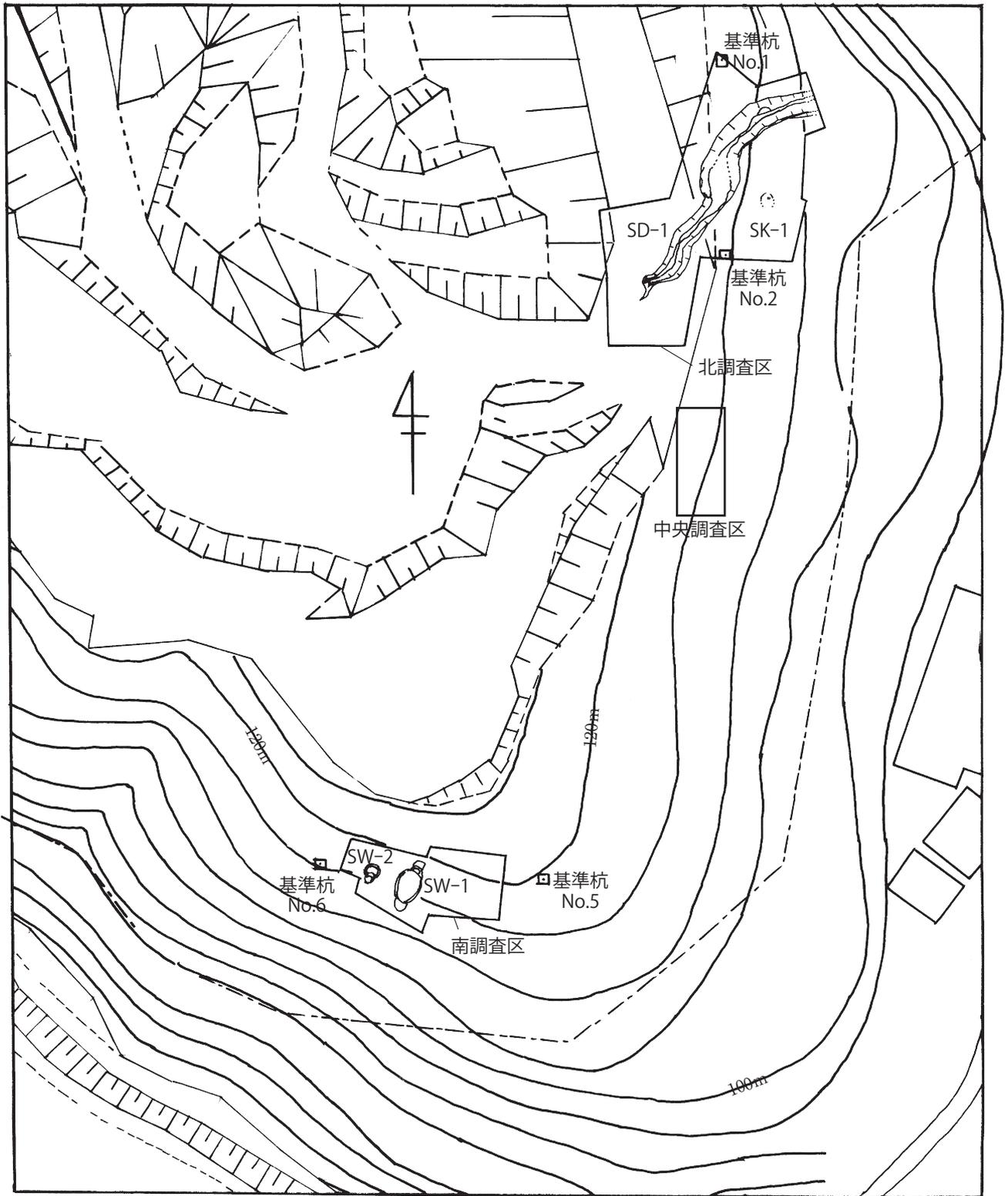


図4 本木・地の神Ⅱ 遺構配置図

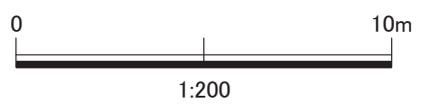
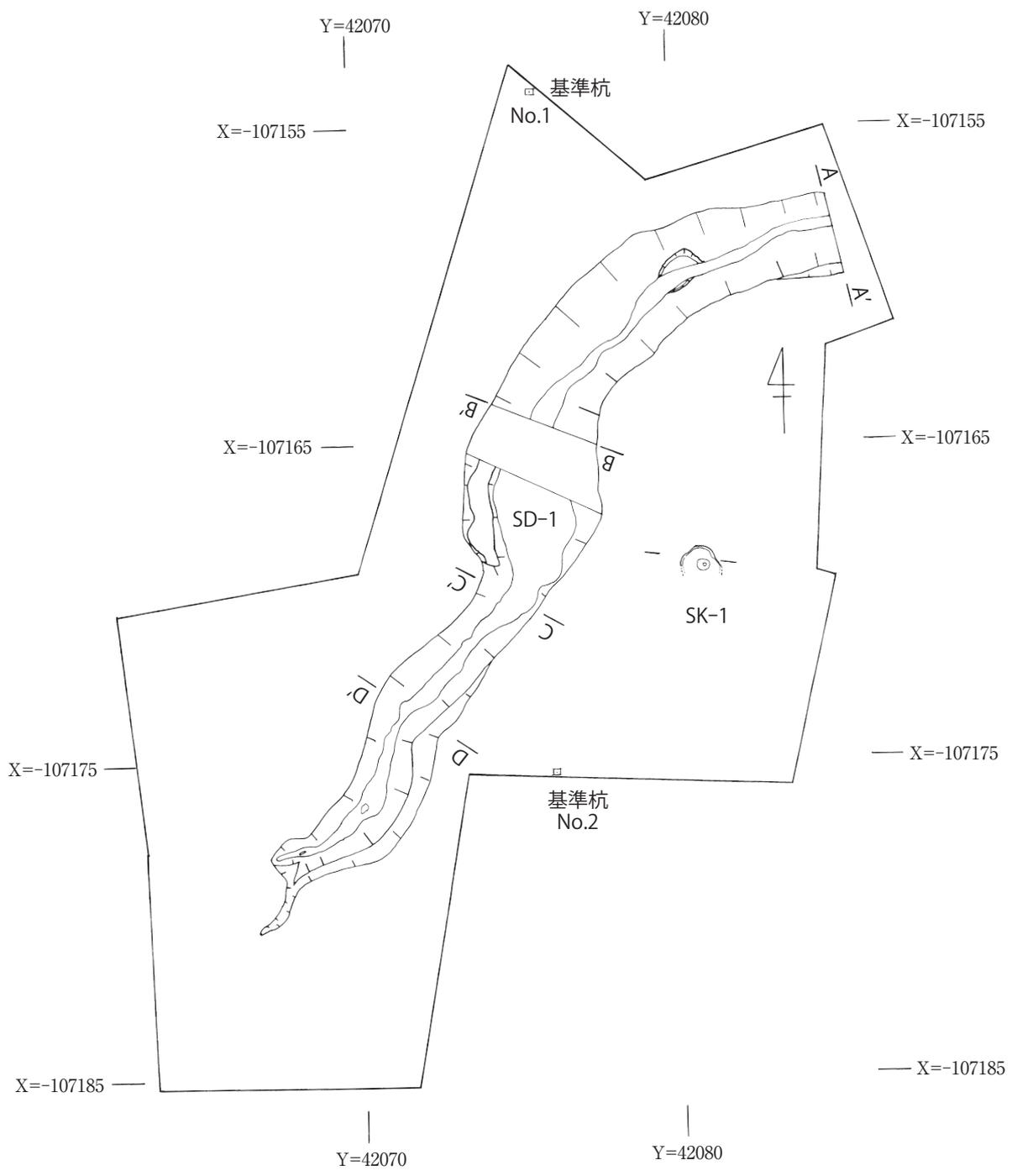
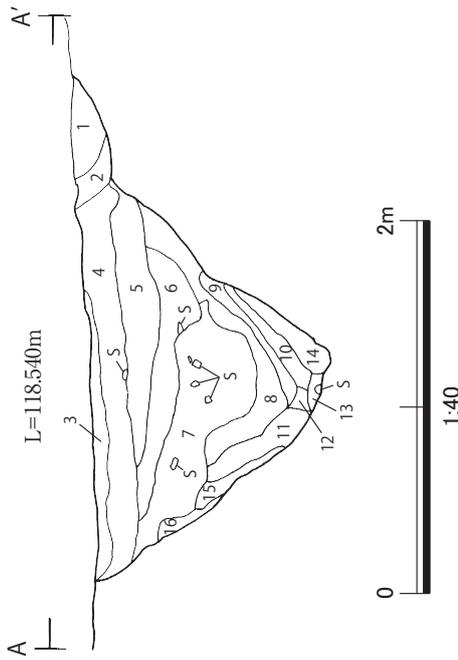
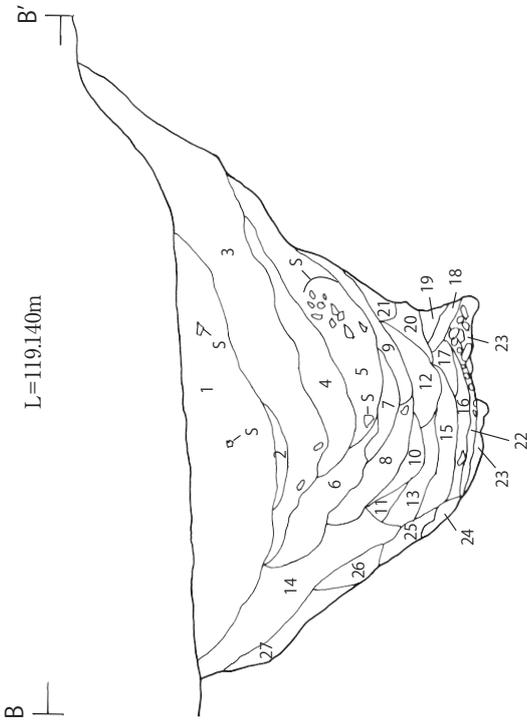


図5 北調査区 遺構配置図



SD-1
土層注記 (A-A')

- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。暗黄褐色 (10YR6/6) 砂質シルトの小ブロックをやや多く含む。(10%)
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。明黄褐色 (10YR6/6) 砂質シルトを少量含む。(7%)
- 3 10YR4/6 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。植物根を多く含む。(人為的堆積)
- 4 10YR4/3 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。明黄褐色 (10YR6/6) 砂質シルトを少量含む。(7%) (人為的堆積)
- 5 10YR2/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。長化物粒を僅かに含む。(1%) 小亜角礫を微量に含む。(自然堆積)
- 6 10YR4/3 黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。小亜角礫 (径5cm未満) を微量に含む。(2%) 明黄褐色 (10YR6/6) シルトの小ブロックをわずかに含む。(2%) (自然堆積)
- 7 10YR6/6 暗黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色 (10YR4/3) シルトの小ブロックを上位。中位。下位に多く含む。(20%) 混合土 (人為的堆積) 小亜角礫 (径5~10cm) を上位。下位に黄褐色シルト中に少量含まれている。粘性なし。中央部に小亜角礫 (径5cm未満) をやや多く含んでいる。細分されるかもしれない。(自然堆積)
- 8 10YR3/3 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。明黄褐色 (10YR6/8) 粘土質シルトの小ブロックを全体にやや多く含まれる。(10%) (人為的堆積)
- 9 10YR6/8 明褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。壁崩壊土。黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。小亜角礫 (径5cm) を全体にやや多く含む。(10%) (本成自然堆積)
- 10 10YR4/3 暗褐色シルト。しまっていない。粘性わずかにあり。小亜角礫 (径5cm未満) を少量含む。明黄褐色 (10YR6/8) 粘土質シルトの小ブロックをわずかに含む。(2%) (人為的堆積)
- 11 10YR4/3 黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルトの小ブロック (花崗岩起源、壁の崩壊土) を少量風組む。(自然堆積)
- 12 10YR4/4 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。壁の崩壊土。(自然堆積)
- 13 10YR5/6 黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。上位に黒褐色 (10YR3/2) シルトの帯状ブロックを多く含む。(10%)
- 14 10YR6/6 明黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。花崗岩起源の灰白色の殻、雲母を全体に幾分含む。(5%) (自然堆積)

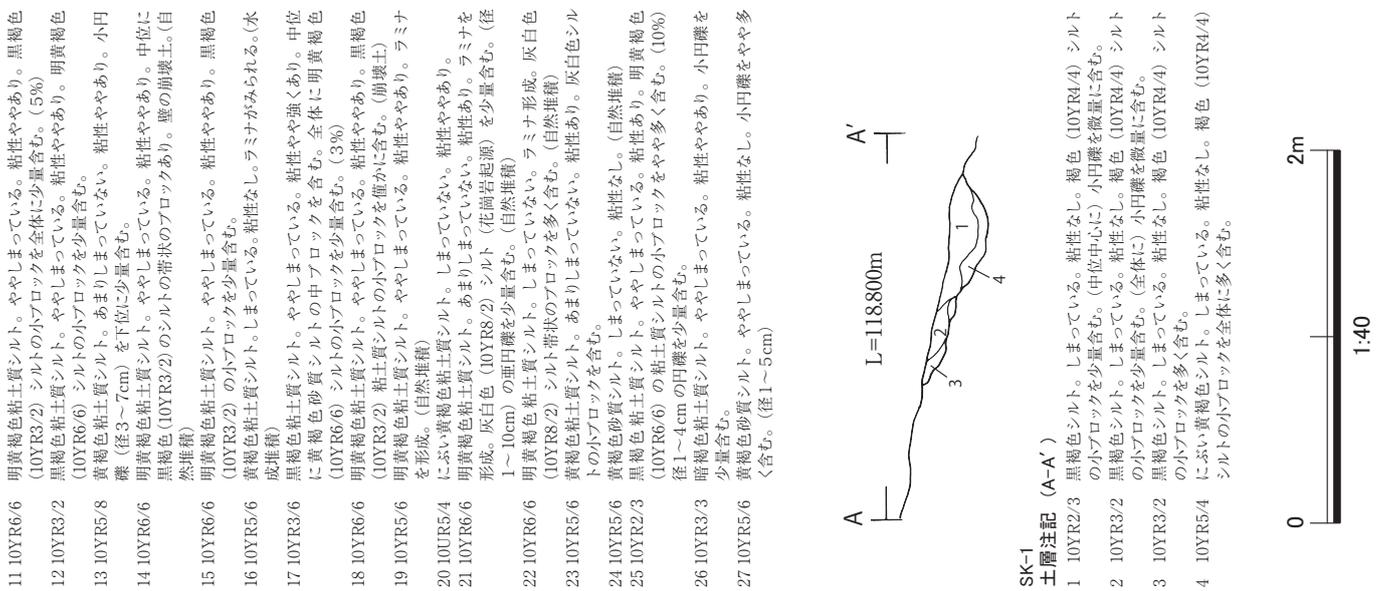


SD-1
土層注記 (B-B')

- 1 10YR4/3 黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。明黄褐色 (10YR6/6) シルトの小ブロックを下半部全体に少量含む (7%) 含む。径4cm未満の小円礫を全体に微量に含む。(3%)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。(自然堆積)
- 3 10YR6/6 明黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。(地山血層起源) 黒褐色 (10YR2/3) シルトの帯状ブロックを中位に多く含む。全体に径5cm未満の小円礫を少量含む。(人為的堆積)
- 4 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。浅黄澄 (10YR8/4) 色のパミスを含む明黄褐色 (10YR6/6) シルトの小ブロックを中位に幾分 (5%) 含む。径4cm未満の小円礫を全体に少量含む。(2%) (人為的堆積)
- 5 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。中位に径5~10cmの小円礫が帯状に含まれている。(自然堆積)
- 6 10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。小円礫 (径2cm未満) を少量含む。(2%)
- 7 10YR5/6 黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色砂の小ブロックを上位に径10cm大の円礫を下位に少量含む。(人為的堆積)
- 8 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色 (10YR6/6) シルトの小ブロックを少量含む。右側に径15cm大の亜角礫を一個含む。
- 9 10YR4/4 褐色シルト。ややしまっていない。粘性なし。明黄褐色 (10YR6/6) シルトの小ブロックを全体に幾分含まれる。(5%)
- 10 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。パミスを少量含む。(自然堆積)
- 11 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。パミスを少量含む。黄褐色シルトの中ブロック。ややしまっている。径3cm未満の小円礫を少量含む。(3%)
- 12 10YR4/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。上位に明黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。(10%)
- 13 10YR3/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性ややあり。下位に明黄褐色シルトの小ブロックをわずかに含む。

- 15 10YR6/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトの小ブロックをやや多く含む。(8%) (混合土)
- 16 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。浅黄澄色のパミスを帯状に少量含む。
- 17 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色 (10YR6/6) 粘土質ブロックをやや多く含む。(10%)
- 18 10YR8/3 浅黄澄砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。花崗岩の風化土・再堆積。
- 19 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。浅黄澄色砂質シルトの小ブロックを少量含む。(3%)
- 20 10YR6/6 明黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。浅黄澄 (10YR6/4) シルトの小ブロックを少量含む。(2%)
- 21 10YR6/6 明黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。
- 22 10YR4/4 褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。径5~15cmの円礫・亜角礫を多く含む。(25%)
- 23 10YR6/4 黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。(自然堆積)
- 24 10YR5/6 黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。
- 25 10YR8/3 浅黄澄砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。花崗岩の風化土(真砂土)
- 26 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黒色 (10YR2/1) 粘土質シルトの小ブロックを多く(25%)含む。(混合土)
- 27 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。

図6 SD-1 (A-A'、B-B') 実測図



- SD-1
土層注記 (C-C')
- 1 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。小円礫・木片を少量含む。(3%) (後世の重機攪乱) (人為的堆積)
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト。ややしまっている。粘性わずかにあり。黄褐色(10YR5/8)シルトの小アプロックを全体に少量含む。(7%) (人為的堆積)
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色(10YR5/8)シルトの小アプロックを少量(7%)含む。上位に小円礫をわずかに含む。(人為的堆積)
 - 4 10YR4/4 褐色シルト。ややしまっている。粘性わずかにあり。小円礫(径3cm中心)を少量含む。(人為的堆積)
 - 5 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。小円礫(径5cm未満)を少量含む。(7%) 黒褐色(10YR2/3)シルトの小アプロックを少量含む。(人為的堆積)
 - 6 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性わずかにあり。黄褐色(10YR5/6)シルトや砂質シルトの小アプロック全体に少量含む。(7%) (人為的堆積)
 - 7 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。暗褐色(10YR3/3)シルトを少量含む。(2%)
 - 8 10YR6/6 明黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。
 - 9 10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色(10YR5/6)シルトの小アプロックを多く含む。(25%) (混合土) (25%)
 - 10 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。小円礫を下に多く含む。(10%)
 - 11 10YR5/4 明黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。黒褐色(10YR2/3)シルトの小アプロックを少量含む。(2%)
 - 12 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。壁からの崩壊土か。地山起源。
 - 13 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。黄褐色(10YR5/6)シルトの小アプロックを僅かに含む。(2%) 小円礫を全体に少量含む。
 - 14 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黒褐色(10YR3/2)シルトの帯状のアプロックをやや多く含む。(20%)
 - 15 10YR4/4 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。暗褐色(10YR3/4)シルトの小アプロックを多く含む。(30%)
 - 16 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。下に亜円礫(径5cm)を少量含む。(2%) 地山起源。
 - 17 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黒褐色(10YR3/2)シルトの帯状のアプロックをやや多く含む。(10%)
 - 18 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト。粘性なし。黄褐色(10YR5/6)シルトの小アプロックを僅かに含む。(2%) 小円礫を全体に少量含む。
- SD-1
土層注記 (D-D')
- 1 10YR3/3 黒褐色シルト。しまっている。粘性ややあり。褐色(10YR4/4)シルトの小アプロックを全体にやや多く含む。(10%) (人為的堆積)
 - 2 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。黒褐色(10YR2/3)シルトの小アプロックを少量含む。
 - 3 10YR2/3 黒褐色シルト。しまっている。粘性わずかにあり。径1~5cmの小亜角礫を少量含む。(5%) 炭化物粒を微量に含む。(1%)
 - 4 10YR3/3 暗褐色シルト。しまっている。粘性なし。明黄褐色(10YR6/6)シルトの小アプロックをやや多く含む。(7%) 幅1~3cmの小亜角礫を少量含む。(5%)
 - 5 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりやや弱い。明黄褐色(10YR6/6)砂質シルトの片側(右側)に多く小アプロックを含む。径1~5cm大の亜角礫を全体に少量含む。(5%)
 - 6 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりやや弱い。粘性なし。明黄褐色(10YR6/6)シルトの小・中アプロックを多く含む。(5%)
 - 7 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。しまりやや弱い。粘性ややあり。明黄褐色(10YR6/6)シルトの小・中アプロック(幅5cm)を多く含む。(25%) 黄褐色(10YR4/3)シルトの小・中アプロックを中に多く含む。(15%)
 - 8 10YR3/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。小亜円礫(径1~5cm)を少量含む。(2%)
 - 9 10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。径1~5cmの明黄褐色(10YR6/6)シルトの中アプロックを多く含む。(15%) 暗褐色(10YR3/3)シルトの小アプロックを少量含む。(5%) 小亜角礫を少量含む。
 - 10 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。小石(径1~3cm)を少量含む。
- SK-1
土層注記 (A-A')
- 1 10YR2/3 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。褐色(10YR4/4)シルトの小アプロックを少量含む。(中位中心に)小円礫を微量に含む。
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。褐色(10YR4/4)シルトの小アプロックを少量含む。(全体に)小円礫を微量に含む。
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。褐色(10YR4/4)シルトの小アプロックを多く含む。
 - 4 10YR5/4 黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。小円礫をやや多く含む。(径1~5cm)

図7 SD-1 (C-C', D-D'), SK-1 実測図

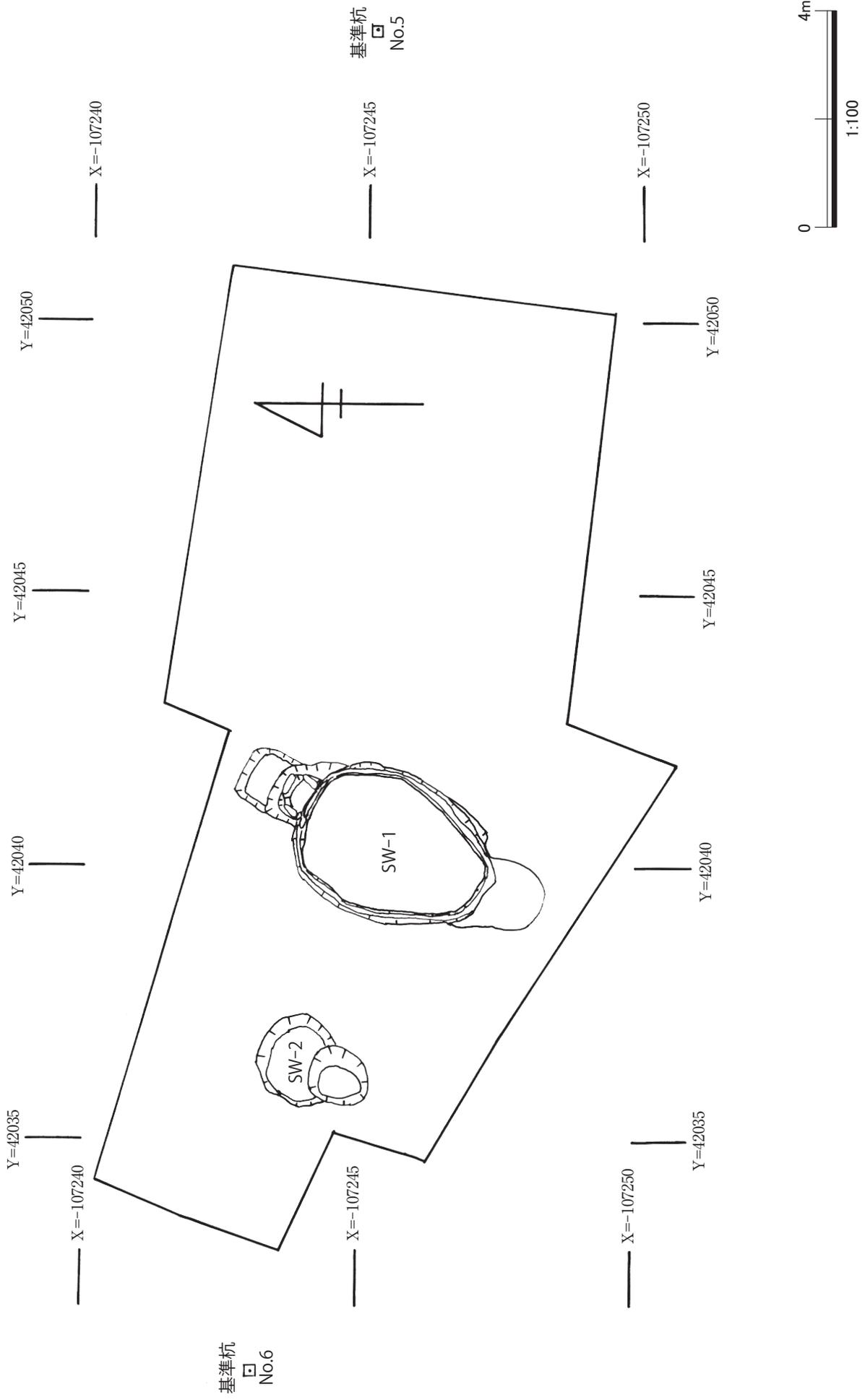
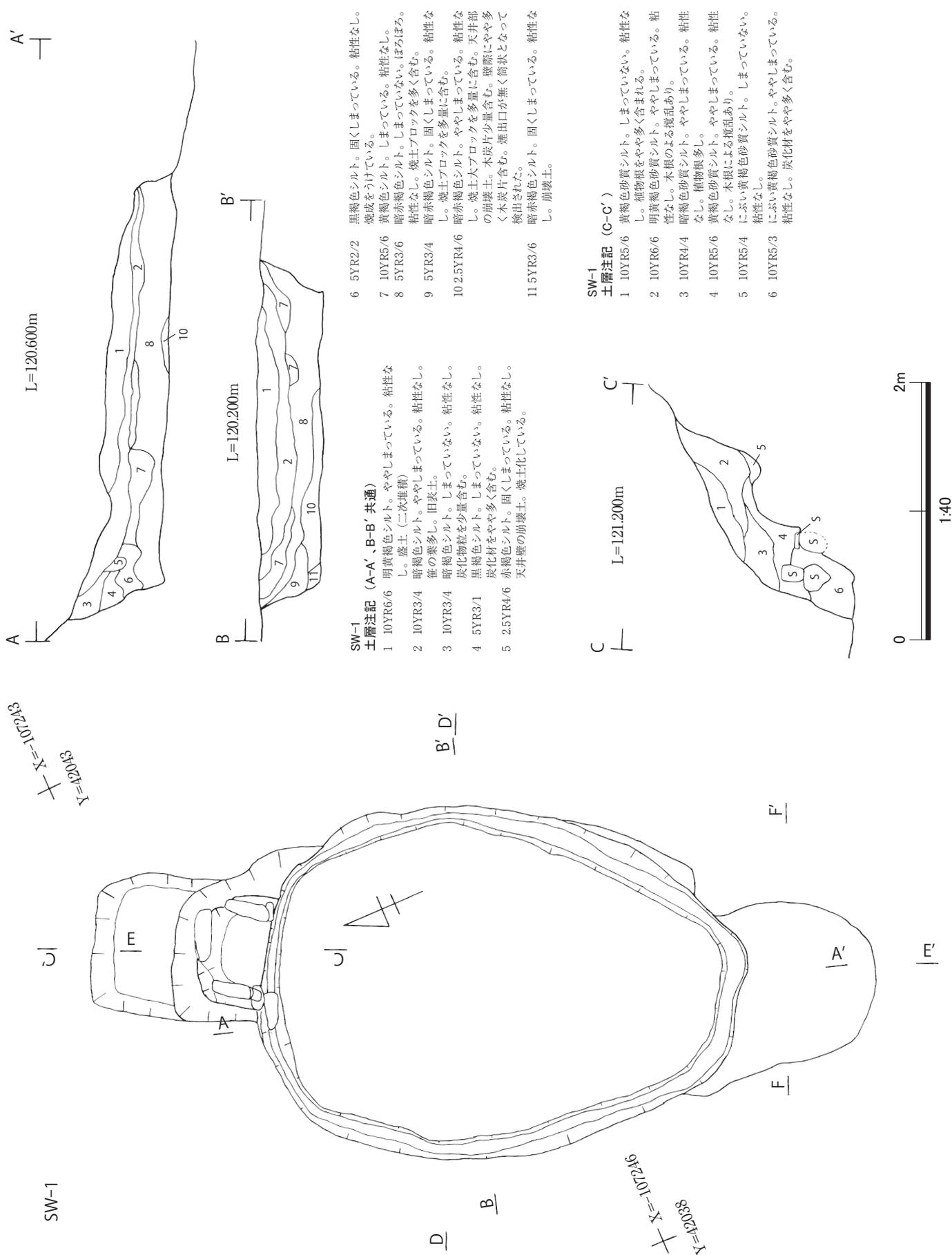


図8 南調査区 遺構配置図



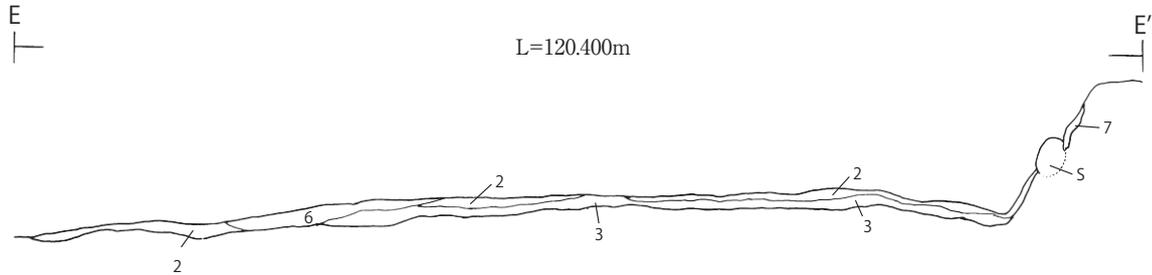
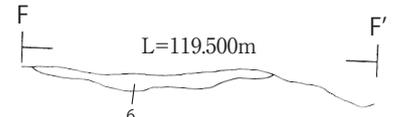
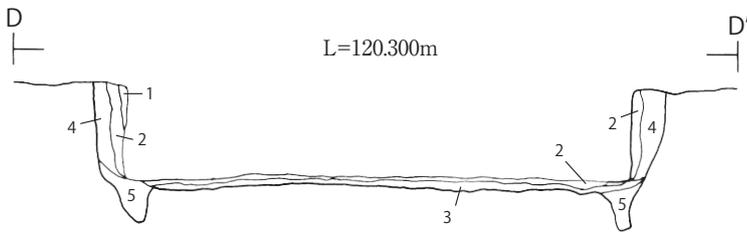
- 6 5YR2/2 黒褐色シルト。固くしまっている。粘性なし。焼成をうけている。
- 7 10YR5/6 黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。
- 8 5YR3/6 暗赤褐色シルト。しまっていない。ぼろぼろ。粘性なし。焼土ブロックを多く含む。
- 9 5YR3/4 暗赤褐色シルト。固くしまっている。粘性なし。焼土ブロックを少量に含む。
- 10 2.5YR4/6 暗赤褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。焼土大アブロックを少量に含む。天井部は木炭片を含む。煙出口が無く筒状となっており、傾斜が緩い。
- 11 5YR3/6 暗赤褐色シルト。固くしまっている。粘性なし。崩壊土。

- SW-1
土層注記 (A-A'、B-B' 共通)
- 1 10YR6/6 明黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。盛土 (二次堆積)
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。葎の葉多し。旧表土。
- 3 10YR3/4 暗褐色シルト。しまっていない。粘性なし。炭化物粒を少量含む。
- 4 5YR3/1 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。炭化材をやや多く含む。
- 5 2.5YR4/6 赤褐色シルト。固くしまっている。粘性なし。天井壁の崩壊土。焼土化している。

- SW-1
土層注記 (C-C')
- 1 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。植物根をやや多く含まれる。
- 2 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。木根のよる攪乱あり。
- 3 10YR4/4 暗褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。植物根多し。
- 4 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。木根による攪乱あり。
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。炭化材をやや多く含む。

図9 SW-1平面・断面 (A-A'、B-B'、C-C') 実測図

SW-1

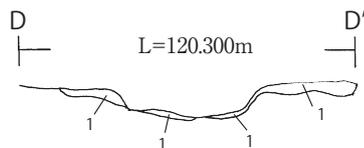
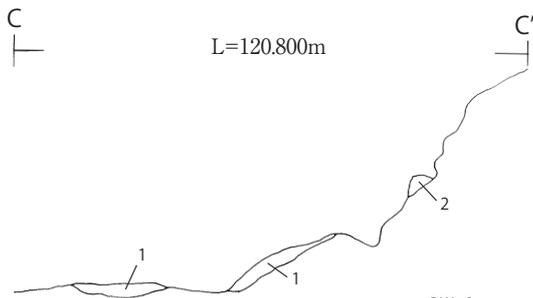
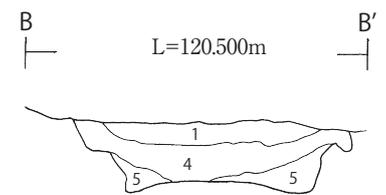
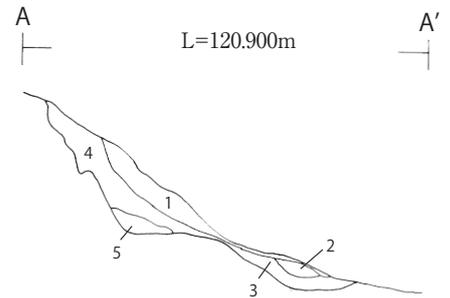
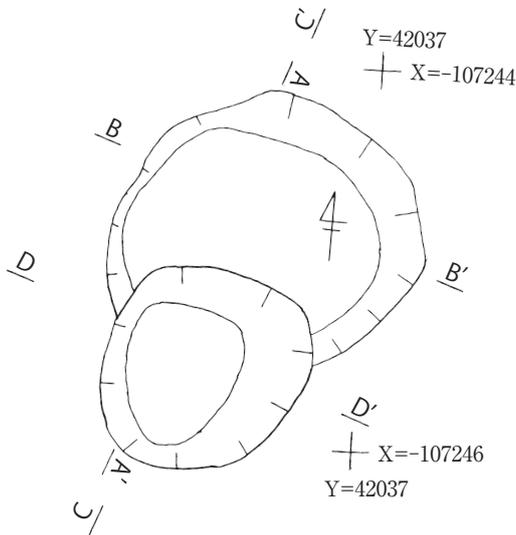


SW-1

土層注記 (D-D'、E-E'、F-F' 共通)

- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。
- 2 5YR2/1 黒褐色陶土(粘土)。固く固体化している。粘性なし。樹液と粘土を加熱で固まった雲母を含む粘土。
- 3 5YR3/3 暗赤褐色シルト。固くなっている。粘性なし。焼土化している。
- 4 5YR3/2 ~ 3/3 暗赤褐色。しまっている。粘性なし。焼土化(グラデーショナルしている)
- 5 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。マサドのブロック、焼土粒を含む。
- 6 10YR4/4 におい赤褐色シルト。上部が固くしまっている。下位は焼土化。粘性なし。焼土。焚口部下底部。
- 7 5YR4/3 におい赤褐色シルト。しまっていない。焼成を受けている。

SW-2 (旧 SW-3)



SW-2

土層注記 (C-C'、D-D' 共通)

- 1 5YR4/4 赤褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。バミス層が焼土化したもの。この土に炭化材・粒が多く含む埋土があり燃焼部と思われる。
- 2 10YR6/4 におい黄澄砂質シルト。しまっていない。粘性なし。埋土の一部。

SW-2

土層注記 (A-A'、B-B' 共通)

- 1 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。植物根多し。(自然堆積)
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト。しまっていない。粘性なし。植物根多し。木炭流を少量含む。(10%)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト。しまっていない。粘性なし。木炭流を多く含む。下部に焼土化して赤変しているところあり。
- 4 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。花崗岩起源。金雲母を多く含む。(自然堆積)
- 5 10YR6/4 におい黄褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。花崗岩起源。金雲母を多く含む。(自然堆積)



1:40

図10 SW-1断面 (D-D'、E-E'、F-F')、SW-2平面・断面実測図



1 調査区遠景（矢印直下が北調査区、ドローンによる空中撮影）



2 調査区遠景（矢印直下が南調査区、南東からドローンによる空中撮影）



1 SD-1 完掘状況遠景 真上から



2 SD-1 北側半掘状況 (北西から)



3 SD-1 北側完掘状況



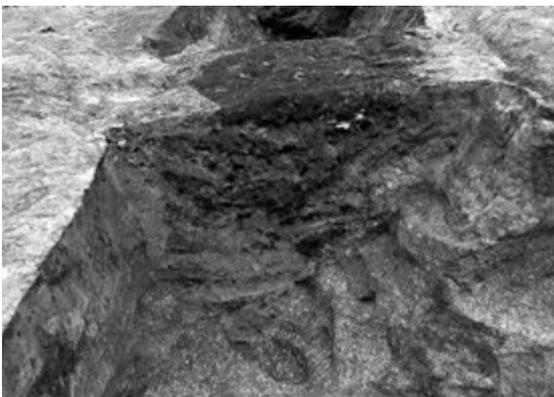
4 SD-1 南側完掘状況 (南東から)



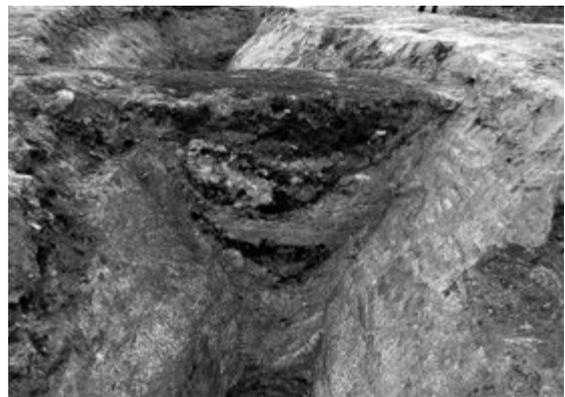
5 SD-1 埋土断面 (A-A') (西から)



6 SD-1 埋土断面 (B-B') (北東から)

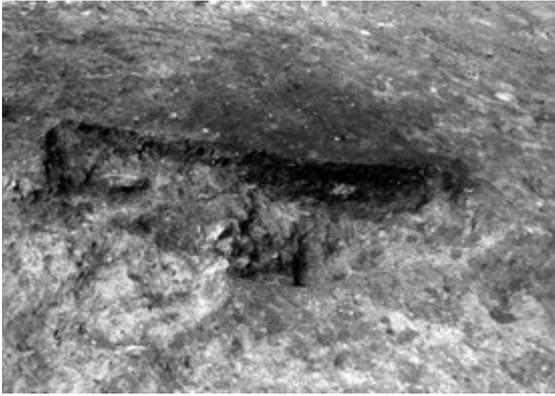


7 SD-1 埋土断面 (C-C') (北東から)



8 SD-1 埋土断面 (D-D') (北から)

写真図版3



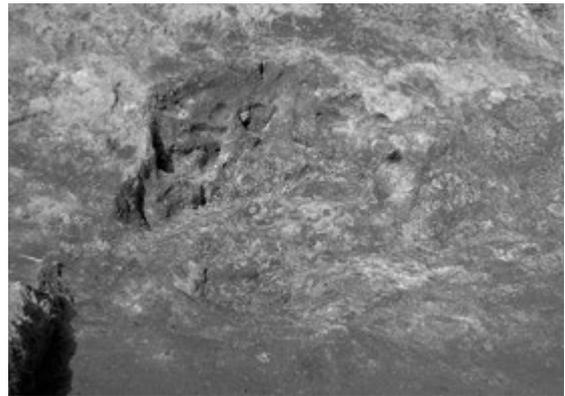
1 SK-1 埋土断面 (南から)



2 SK-1 完掘状況 (東から)



3 SK-1 検出状況 (南西から)



4 SW-2 完掘状況 (南から)



5 SW-2 埋土断面 (東西) 南から



6 SW-2 埋土断面 (南北) 西から



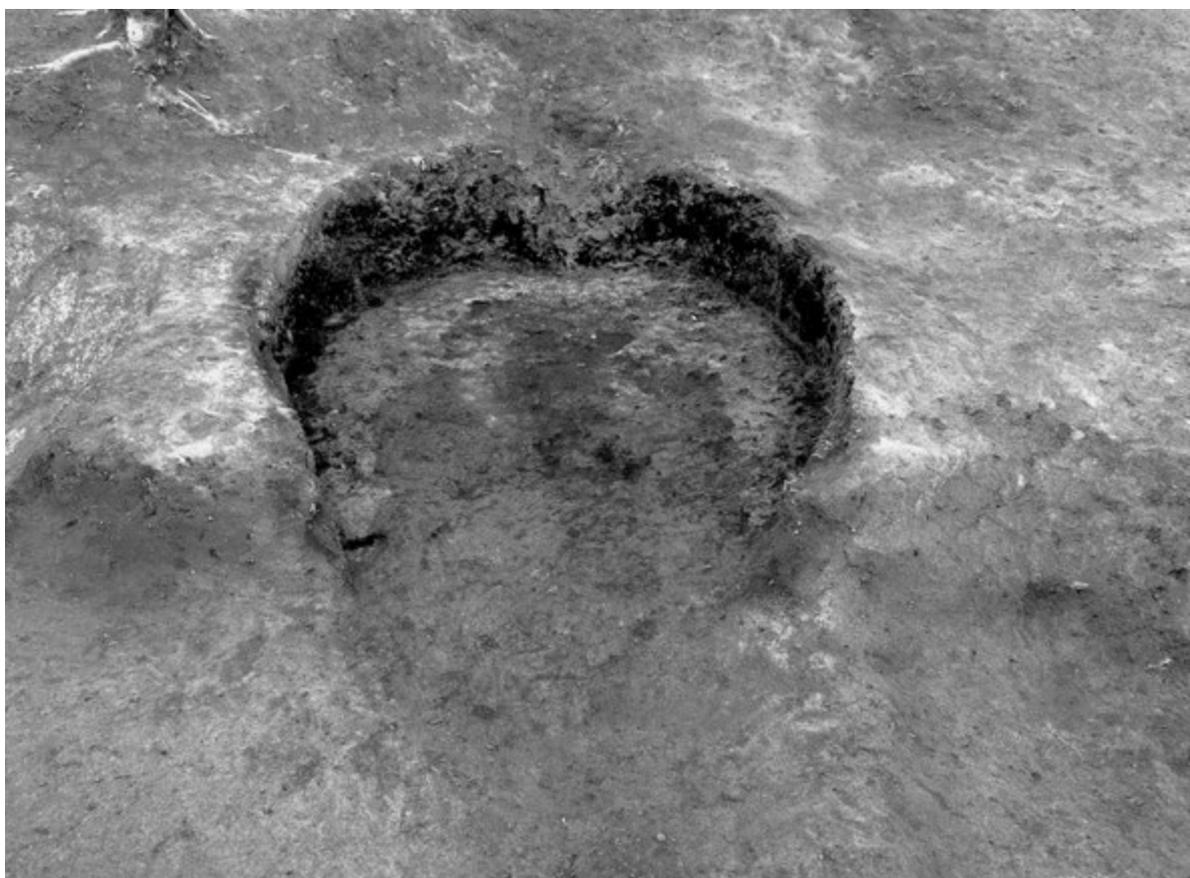
7 SW-2 底面断ち割り断面 (南北) 東から



8 SW-2 底面断ち割り断面 (南西) 南から



1 SW-1 埋土断面 (南北) 西から



2 SW-1 完掘状況 (焚口、炭化室)

写真図版5



1 SW-1 埋土断面（東西）南から



2 煙道入り口部（南から）



3 煙道埋土断面（東から）



4 煙道埋土断面（東から）



5 焚口、燃烧部断ち割り断面（南北）東から



6 焚口、燃烧部断ち割り断面（東西）南から



7 焚口部断ち割り（東西）南から



8 SW-1 断ち割り状況（南から）

抄 録

ふりがな	もとき・じのかみ2いせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	本木・地の神Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	土石採取事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	菅原孝明・光井文行・阿部充							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒029-3105 一関市花泉町涌津字一ノ町29 TEL0191-82-2242							
発行年月日	2024年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとき 本木	いちのせきしだいとうちょう 一関市大東町 ざるさわあざもとき 猿沢字本木35-1	03209	NF50- 2234	39° 2' 1"	141° 19' 9"	20210719 ～ 20211015	500㎡	土石採取
じのかみ2 地の神Ⅱ	いちのせきしだいとうちょう 一関市大東町 ざるさわあざもとき 猿沢字本木35-1	03209	NF50- 2254	39° 1' 51"	141° 19' 9"	20210719 ～ 20211015	320㎡	土石採取
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本木	散布地	縄文、近世、近代	土坑、大溝	なし				
地の神Ⅱ	散布地	近世、近代	炭窯	なし				
要約	今回の調査では、本木遺跡（北調査区）から大溝跡と土坑、地の神Ⅱ遺跡（南調査区）から炭窯を検出した。遺物はなかったが、排水のためと思われる溝や炭窯の変遷を知る材料を得ることができた。							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集

本木・地の神Ⅱ遺跡発掘調査報告書

土石採取事業に伴う発掘調査

発行年月日 令和6月3月29日

発行 株式会社山友建設
〒029-0711
岩手県一関市大東町大原字有南田36-1
電話 0191-72-3167

編集 一関市教育委員会文化財課
〒029-3105
岩手県一関市花泉町涌津字一ノ町29
電話 0191-82-2242

印刷 トーバン印刷株式会社一関営業所
〒021-0821
一関市三関字日照107-5
電話 0191-31-8808